

# 学協会連絡会における会員の女性比率調査、 及び、役職、委員会における女性比率調査の報告

2007年9月15日  
男女共同参画学協会連絡会

男女共同参画学協会連絡会に加入している65学協会について、2007年8月時点における各学協会の(1)学生会員と一般会員の女性比率、および、(2)役職、委員会における女性比率を調べた。

学生会員と一般会員の定義は以下の通りである。

- 学生会員: 大学院在学中で会費をはらって登録している人
- 一般会員: 学生会員以外で、その分野でプロの研究者として何らかの職を得ることができた人
- 女性比率: 上記それぞれの会員数に対する女性会員の割合を%表示したもの

表1では、各学協会を(1)理学生物系、(2)理学非生物系、(3)建築系、(4)情報・工学・土木系、(5)総合・複合領域系、(6)その他、の大まかなグループに分類し、それぞれのグループの中で総会員における女性比率が高い順に学協会を並べた。

表2では同様に、各学協会をグループ分けし、役職、委員会における女性比率を調べた。(ただし、表2では広い意味での工学系である、建築、情報、工学、土木系はひとつのグループにまとめた。)

図1の分散図は、横軸に学生会員の女性比率(%)、縦軸に一般会員の女性比率(%)をとり、各学協会連絡会の2007年8月時点における相対位置をプロットしたものである。その分野のプロを志した女性の学生会員が、そのままその分野のプロの研究者(一般会員)となれば、学生会員と一般会員の女性比率はほぼ等しくなるはずである。そこで、「学生会員の女性比率/一般会員の女性比率」の数値を『格差』という言葉で表し、「プロの研究者としての女性のその分野への定着しやすさ」を示す一つのバロメーターと考え、比較を行った。また、表1の(1)~(5)の各系における一般会員と学生会員それぞれの平均女性会員比率を棒グラフに表したものが図2である。

図1: 各学協会における女性比率の散布図。

横軸が学生会員、縦軸が一般会員の女性比率。比率の格差がない(1倍=45度の斜線)、格差1.5倍、2倍、4倍に相当する線を示した。比率の格差が大きな学会ほど、図の下のほうに位置することになる。

図2: 各系における平均女性比率。

建築系は、工学系の中でも際だって女性比率が高いため、情報・工学・土木系とは別に図示した。また、あらたに総合・複合領域系をもうけた。(日本女性技術者フォーラム、日本女性科学者の会、日本科学者会議はここには加えていない。)

## 【第2回女性比率調査に見られる傾向】

表1に記載された「連絡会加盟各学協会における女性比率調査」は、2005年に行われた第1回調査([http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/enquete\\_02/enquete\\_02.html](http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/enquete_02/enquete_02.html))について、第2回目の調査である。そのエッセンスを取りまとめたのが図1、図2である。

前回の調査に比べて、図2でグラフの上方向にプロットが移行した学会も複数あり、全体的に、学生会員、一般会員いずれにおいても、女性比率は漸増傾向にあることがうかがえる。

しかし、系としてみた場合、生物系、理学非生物系、建築系、工学系の占める位置は前回と同様の傾向にある。この傾向は、図2で示された各系における女性比率が、2005年の調査と殆ど変わらない数値(%)を示していることからよくわかる。依然、工学系、理学非生物学系の女性比率は、学生・一般ともに低く、生物系、建築系ではその比率は高い。

図1に示された各学会のスポットのうち、神経科学、細胞生物、動物の各学会では、そのプロットの位置が格差の線をこえて上方向に移動している。神経科学学会、細胞生物学会の場合は、学生会員の女性比率が漸減したにもかかわらず、一般会員における女性比率が増加、もしくは殆どかわらなかつたための上方移動であり、動物学会の場合、学生・一般いずれもの女性比率が上昇したことによる。また、数学会のように、プロットは依然格差2の線上にあるものの、女性比率そのものは目立って上昇している学会もある。

神経科学学会、細胞生物学会、動物学会のような格差線をこえてのプロットのシフトが、若手女性研究者がプロとしてその分野に定着しつつあると見て良いのか否かは、各学会の総会員数の増減とも関連しており、このグラフの位置だけで云々すべきではないと考えられる。しかしながら、今後とも継続的な調査を行ってその推移をみることは意味があると思われる。各学協会におかれては、2005年の調査と本調査を比較して、各々の学会の女性比率の動向をさらにくわしく把握していただきたい。

表2にとりまとめた「役職、委員会における女性比率調査」は2005年(応用物理学会担当)、2006年(日本化学会担当)について、3回目の調査(日本分子生物学会担当)である。表2については、昨年と大きな違いがないので今回は特に考察はしない。いずれにせよ、(1)学生会員と一般会員の女性比率調査(表1)と(2)役職、委員会における女性比率調査(表2)はいずれも定点調査として継続的に調査を続けていくべきである。

\*この調査とその結果の引用に際しては、必ず「連絡会加盟学協会における女性比率に関する調査」(2007年8月・男女共同参画学協会連絡会)と出典をご明記ください。